

三

後

河

抄

A13  
4440  
5



113  
4440  
5



全傳 駿河舞卷之五

十四韵 平向乃名番

神樂良三八北川宗九門はむうひてつやう。互の主君細川山谷  
 乃霍執も原を仇さハ二振の御坂の終矢より。意仁の丸はぬふとい  
 といも。両家の疑念を散せんよる。赤松満祐を攻ヒし。狂彼が  
 余於一子四帟祐国を始り。一味徒黨の国賊を征め。四海の万  
 民安きま居し。ゆふにそれを功は山名家の再興あり。則右  
 近之助務家及を。故入道宗全公の養子と定め。天津妃と慕し  
 細川家の傳えど。嫡男勝在代君ありませ。両家の懸念疑  
 り。勢ふうへ仁兄と小子原来。意恨つらごま。互は力を添



全傳卷之五

合て国賊を亡き奇斗をばよめは指図あまうと忠臣無二の  
 祠を感と桂九郎門腰力を三八がちの慮し是こそ山名家へ  
 流りて流る九の出奴りて紀整尔と奪ひあつたを皮  
 は旅誌と偽りてばせせりては奴をあらはして入道が片  
 腕も思へども爰は一身の強みありそ故にこの朝もやごとく  
 子四郎旅国と天津妃を殺せしむ妃を不重あけはるも  
 小子思慮をせしむ今も美人の夢へある妃をれはごとくを  
 はあらず某が心虚の虚実をいえ存なるゆへうのこく  
 私智沙と入道を欺らん妃の在りお知せずしそやごとく  
 ぐり遠ずといふ彼をじ寸斗略も成れりごとく去りて

山名家の重宝源九を仁兄は流けあをせしむ子はあまの  
 死級を小子は流け流る天津妃が去向を尋物満祐が不重  
 りうを詰りてま一つび細川右近之助徳家との結髪  
 せしよつたひまも細川家へ嫁せどつと貞女両夫はまきんす  
 とて自殺しりしと首討てまゆりしと穢しやうは詰りし年  
 齡おほる死級多くては時りてと理をせある朝は三八も感伏  
 の母の子枝が止骸精も透言は任せ往生院は葬つたあふ  
 まどもいふも仁兄の位の下く死級を死と偽りしあまも定る  
 宿縁ありめと女児の首をとりしと打泣月をんせしと貞骨  
 け宗尤あま差おせば細川文九押しき実世中は武士の身

ながりきそのハあつと。昔も國は持國を悪ぶ心の程でやるせり  
 き。始の光宗は仏もよろ。すしをきて。店主の尼は猶も天  
 津妃ははまきや。ひ。兩個が心。應形母し。は。ゆ。わ。れ。さ。と  
 於。あ。が。言。お。ん。あ。中。さ。は。鼓。べ。て。る。の。ま。う。は。り。の。つ。ま。う。者  
 らん。貞孝二ツを令りて。死る。妙。女。月。法。を。治。吊。ふ。妙  
 女。女。月。末。世。の。佛。果。に。疑。ひ。す。と。い。と。殊。勝。な。念。珠。を。丸。り。  
 回。向。す。ま。ん。有。疑。ま。冥。加。の。程。も。お。ま。れ。ま。と。三。八。を。平。伏。を  
 天津妃も涙かぐ。う。づ。う。や。へ。は。此。業。は。死。し。ま。ま。う。づ。う。が。身。は  
 り。り。げ。慈。を。を。り。の。世。より。報。ぜん。り。も。あ。や。つ。り。り。り。世。の。て。ま  
 あ。の。世。の。い。せ。の。ち。ぢ。ぢ。り。猶。あ。ま。る。は。法。び。無。量。壽。の。せ。度。を。か。て。

待て。後。は。支。社。が。家。身。の。罪。を。消。ん。と。の。寸。志。を。更。て。成。佛。を。ま  
 と。つ。ひ。つ。香。の。包。を。出。し。け。一。種。の。父。上。る。武。林。系。政。云。り。并。依。は。じ  
 日。蔭。の。花。と。よ。名。香。平。向。て。た。く。ま。く。れ。バ。三。八。を。押。つ。て。死  
 此。名。香。を。流。す。日。蔭。乃。卷。あ。て。ひ。り。室。町。は。重。宝。あ。る。の。い。り。程  
 年月を。死。級。う。り。も。一。及。此。香。を。く。あ。せ。い。生。る。か。と。く。ま  
 て。面。貌。の。ま。せ。さ。る。や。日。蔭。の。花。と。名。つ。け。し。や。り。あ。時。は。一  
 り。の。名。香。の。使。も。款。を。款。く。半。集。は。用。あ。る。り。も。有。や。せ。ん。  
 希。と。更。納。ま。ん。挂。九。傳。の。詞。を。り。く。さ。り。人。跡。希。る。暖。味  
 の。奥。と。い。ひ。あ。う。う。款。地。へ。洩。か。ひ。り。六。ヶ。あ。お。は。後。名。の。山。川  
 宗。九。米。門。を。名。宗。て。れ。く。満。祐。は。一。味。と。見。せ。因。賊。を。攻。止。ま。

近ハ三ハどのとハ欲日チ死級をりつて絶絶尔を歌ハハ福葉  
山の谷川へ流すべし仁兄を川下ニ在て拾ひぬるは葉  
のハまよ先別秋也ハ奴也其時こそ婚ひとてお納らじ  
いつきもさうハと立つてまハハも尼君も二人ハ散帛ひを  
思き多くも影へとも世を捨人の草の底ハ貴財祝珠といふ  
かき書ハ花より花あやき六の街ハ迷ひると雪路を照らす  
白妙の足爪をとりて兩個ハ雪吹を凌ぐ美濃の必指紫山  
へと心ぎん

十五韻 大原の冬枯

薄く門を木の葉は埋めて人も寂これ大原の里と流るる

凡情小うりくむ皇都の外ふる大原ハ人目希ふる亦ふるは  
殊冬枯のやまきまは一個の旅客木の葉は埋むるをこ  
し来りて木の松の蔭ハ小児の泣声志はりよつめる人への  
旅客立とあり想して捨子を介せるハ其父母多苦ませぬ  
るれ又ハせらあま哀路の中ハ情の胤をやじおとて止  
をぬと捨る人ハ人目を忍び其昏るるはより後ふるでハ捨る  
ふいりや往来も絶し雨ふるといハひふる其下午時もさるは  
備をまとい小児眼中ハ貴人の相あるハ尋常の者の子は  
あし何ままれ其ハ殺多の捨子を拾ひ得て乳房をあつへ  
養育するを是ハ捨る若根あじと思ひて新のしとくを



手向  
乃名  
香



國に來る旅中とて、も捨し小兒を刃の時の連泊つて、赤子とすれど。  
 今更に見馴る指子の先宗といひ、さうさ去來拾ひ得て、  
 抱兒しきて、諸人の足を早めて、終始より、少刻くと声を上げ。  
 室町風の玄流の武士威儀を、西へくみ、さういひ、今其方指ひ  
 小兒の衣、林是利家の爰、从職細川捨元の嫡男捨元代と申、  
 年三才、またさうさ、連泊、西へくみ、世上の風流、捨元の身、右近介  
 捨家西宮の指君、心を棄つて、終始、放流、あつて、室町及  
 ず、今更に、海の政、及を、執る爰、从捨元、いひ、血脈の、  
 用捨成、ごととて、室都を、退放、あり、いひ、是、若、頃、邪、心を、  
 執し、依、依、あ、ま、本、ひ、ま、つ、ま、い、か、る、倭、人、後、者、の、古、代、より、や、い、

出、え、細、川、捨、元、ハ、子、捨、元、代、出、産、の、后、中、捨、家、を、味、右、近、介、  
 の、才、より、西、宮、の、指、君、ハ、別、際、を、さ、す、の、中、中、は、通、不、を、  
 傍、り、勤、尚、す、い、捨、あ、ま、亦、从、の、を、地、を、と、ん、の、を、  
 ま、り、の、風、声、す、と、い、く、捨、元、ハ、右、近、若、も、命、して、  
 を、け、世、邊、は、捨、を、ま、け、の、奥、方、王、置、の、指、君、  
 連、泊、ま、つ、ま、つ、ま、つ、も、捨、元、の、命、ま、つ、つ、て、  
 ち、指、ひ、ま、ひ、て、い、世、上、の、風、流、を、防、く、ま、  
 も、衣、指、ひ、ま、ひ、て、い、世、上、の、風、流、を、防、く、ま、  
 者、あ、ら、い、則、ち、人、を、実、又、と、て、藩、中、の、家、士、  
 ら、ん、る、過、刻、より、本、法、を、侍、来、を、侍、来、  
 其、方、指、ひ、ま、ひ、

実父と致ひ親を我が方へ下されば養父へ過て沙汰をせと始終を  
 ずて件の旅人が別段を傾めて思案を極め此小児を後伏川  
 家の婦子とありて居りて其子細くつるの素心は後  
 の小伏の住人組屋の官太馬つとて年中各主をうけ也る旅者  
 人あるは世の流るるも思ひ神佛國に詣でるるも嫌  
 ひるれども乳房を志す小児の捨けつる指ひぬて立ゆり養  
 育せりれ致志をば是度ちの吾根もや育けん一年痘神  
 旅人の女と化して我が家の一宿を乞ふるもつるるといひ病  
 知く宿を貸つるがそを杖の後より旅人告てつるるを病の痘  
 神より汝年来救多の小児を捨ひぬて養育せり度ちの

慈悲よりて今より旅げ家は育つる小児痘瘡のかりを種く  
 種るは生痘瘡の多きひるるれ又人家の形は紐を六良方為宿と  
 書る張札あり必痘瘡の患ひを除くやと見えぬうらまはち  
 て宵の旅人をさるる其行去を知らず備へ痘神するるを知らず  
 有り厥后より捨子と見えぬつるは今日  
 後伏家の婦子を捨ひたるも養父の命を公達ひるる世  
 とるては世の上のすへといひ見まての吾根もも秋仙もて捨  
 ひて思ひもせんも知く又四海の政及を司り邪心を伏す是  
 利家の後伏細川家より一旦捨つる小児をば又居せしと見え  
 是偽りを世防る斗ひりて天下の陸とぬるると同舎氣



災の一現屋よひとまきて細川の家士八人の綱もろく差ひ入て  
 てぞ危りり。彼の旅人の懐に掛る代君を抱きしめて世をまて  
 多の子を指すとひつとも。氏素性の知るところに小見斗と  
 いひは。爰に家の嫡子と有うふ。尚も疎略は仕らね。あつ守  
 る氣をひりりふまて。いひつゝ急ぐ老の足も。若後の玉へまゆる。

十六韻 商家の繁栄

耳食録云痘神何神也姑勿深考或曰居峨眉山姐妹三人身着  
 麻衣蓋女仙之派至人間痘疹之疾人呼為麻娘云神甚美驗  
 而嚴于小節病痘之家為位奉之言語稍不檢衣物猶不潔及  
 誠敬少懈者病者輒作神言語叩譴之雖私隱無不昭揭其

甚者痘或不治為得罪於神也靈異之不可勝紀然亦非妄禍人  
 者吾卿陳君洪書兒時以痘死置於東廂其母撫而哭之坐於  
 戸限倦而假寐見三麻衣婦人入室視兒驚曰向幾誤此望都  
 宰也可放還言畢出戸去母驚竟兒已甦矣後果仕望都縣  
 令罷官歸今猶在由是觀之痘殤者非盡神之為政也其亦  
 數之前定者歟。爰に若小湊組を六郎九波門が家より一年痘  
 疹を宿せり。あじより己来け家より痘疹の患ひあり。救ふ  
 指ひゆる小見のづもを病して成長しける。往日都大原  
 の野辺におちて拾ひ。爰に細川家の嫡子掛る代君。以日け  
 家は在て痘疹突し。熱さ患のり。見点のりも。こて灌漿のり。



大原  
能冬  
拈



の目もみぢくまの傍は自度より物邊のふをまらり其邊に未を  
 引ひて竜田小念の御衆を欺き瘡癩人を始り着病人傍に群  
 き振敷の小兒おまゝの衣服を奪ひ神楽の法  
 淨りしてけり屋へ出家比丘尼の出入を忘る歳すまはる  
 こを後臥家の嫡子さまへ集へ二競神楽良三八の妻を丸  
 本を良人のおまゝを川竹に沈めば壱子三松の妻を青は  
 こくまをば深く御は長竹の伏水を稻荷のま居を捨て  
 其子の行去を知らんとて年月をうらみて母のうらみのまゝ  
 山崎の海を越え八野原のまは休らひ子を思ひ  
 雛子の啼きもまゝ流村のけり卦祝を志し大の声も其は泪

をとめり。一挙の根をぐく半日の命のまゝの幾夜も  
 うありつゝあまのひとをまゝと書い老樸の子里をまゝと  
 けくまをハ飢鷹の二呼をまゝのまゝと書いておまをせり  
 客の風声を聞き世は希ある人こそはさる後のお小娘の  
 住人組屋六郎九郎とてその教の小兒を括ひて書かすの  
 を。若根とさるばはははするまゝやま子のと松も其人もや  
 括ひまゝ何はまゝの地へ括ひておまんとおま日おつひて  
 六程まゝ若後のお小娘は着り括ひて丸木ハ組屋六郎九郎  
 住人をまゝ尋ひて彼首はまゝをたれ高くおま居  
 くお賈入りして米穀塩醬のたれを始りておまのまゝの



宅を推入各處を占る者人となり君の仇討去を身しつと去  
 四り奪ひまふればまゝ朽果んくといふ中款うりく存可ま  
 後の跡を尋ずして不き今日家も人來居居一さ何また  
 入んものもはあを不真を降救免まで原のくく月  
 伴之必く入る武士とはあつて生匪の面目もまらるべ  
 牙然るるるり殺ひく入るは袂羽を改めゆちの保つて花  
 もつた程まで忠義を必す方まばあとも味方を  
 招く時より人勅あゆみ一交そののりとも不意くは入汝が  
 心腹故主を止せしあゆの敵入知川侍元その一子侍義代  
 中んを推ひ九折又一日痘瘡を病む小兒をいさる致さ

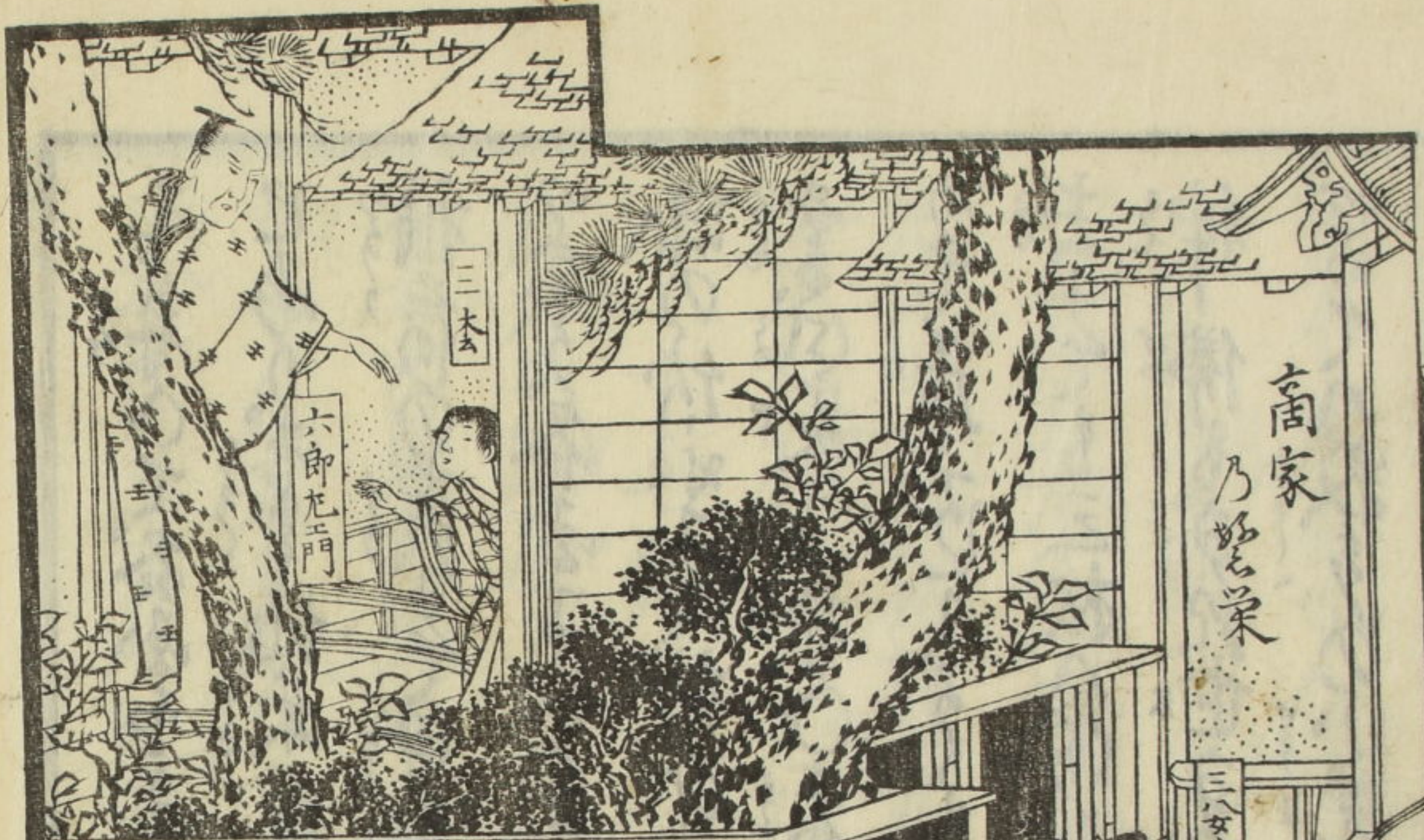
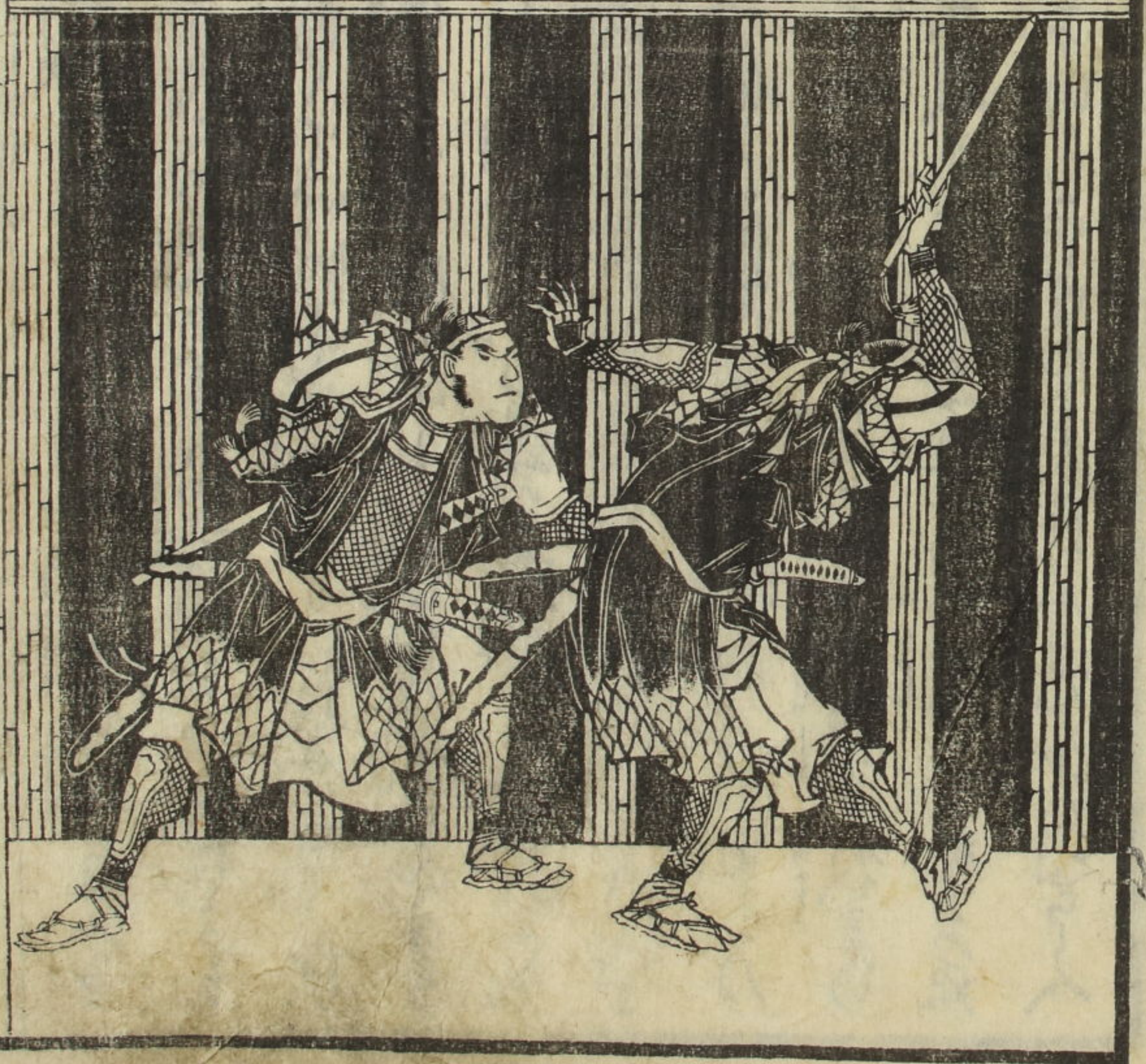
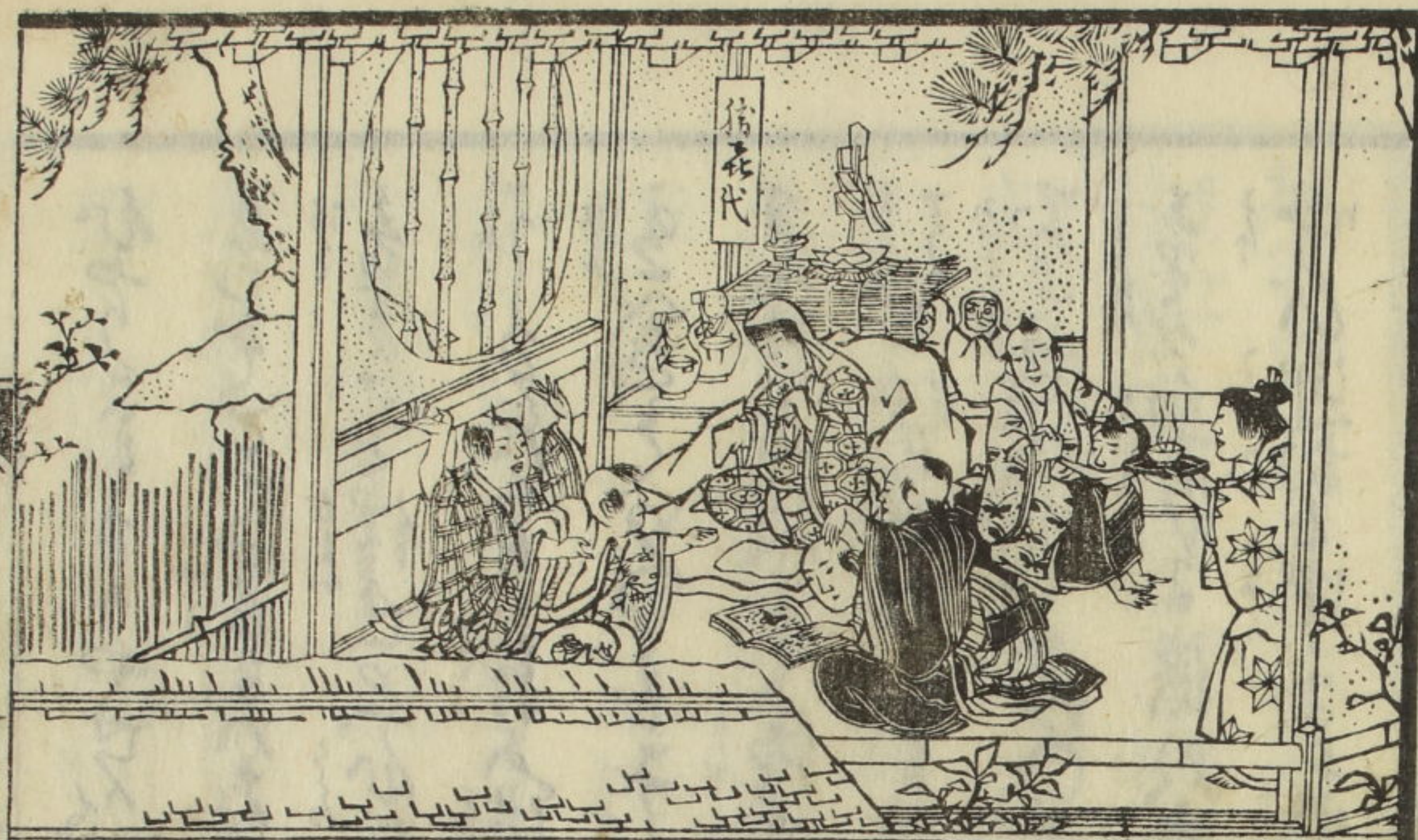
此の時の噂は故主を於て後家子組一あまらひら  
 と居尺高は成て蜀をバ六弟在居つ此とも勅せらる主君の思共  
 えずそめ身を赤松家の余歎と思つた方へ商家の二はを  
 の企のひのくして侍義代を推ひは是則人變同承るる  
 主君のあゆの敵後家の一子るるを被といひ軍神への血  
 祭まらえんをせとと尤もい返くといひけまバ入道も義懐  
 一子四弟祐因を霜雲太弟と名きて救多の城佐をまら  
 山名が家長桂左衛門を北川宗左衛門と改名して一味のり其  
 方の心腹あつて今こそい勅氣をとりてあゆの主長上月  
 伴之也尚も忠義を讀せんはあ果元美法の園橋系ま

おろそかに再々せん兄一角が家も移りて付死せし其忠心の切な  
よめてはが動氣免す跡も入るが産婦人近細川家の重  
宝富士丸の二振らも瓜分ある上り其奴をとりて清  
彦代が首打打た得るすと思ひけるまふ命よ是  
此より密に用をたせしめぬ。

十七 釣 別家の血替

丸木へ廻座が内の光系はうつくしく思ひまふまづ案内と  
してさ弟丸彦は面談しうたはしひんまきバ何のやんと立  
てて丸木は匂ひ仔細を委しく尋ねるよ。此等の里を  
おろそかにせまり良人のあるふ一子を捨厭后をまが釣去

を尋ひて各必をさぬうは家はまきくの子を拾ひ其の育  
とゆりなき地味はことの有校育業を借りりや依水の  
桶前の表まで男子を拾ひるびやと同く昔は六第九馬  
ひやう各必はおろそかに救多の男女の捨て子を拾ひぬりこと  
珠の依水まで拾ひる男子は着てはとせ丸木も十方  
養ひ家も尋ひまゐりまゐりまゐりまゐりまゐりまゐり  
めて居るはよふくも秋子の跡をくおまを相をさるべ  
去りても二松は河必の浦のうらる里は居るのぞく守め  
神佛もおれ世さるうく恨も伝ふまを秋くぞり理する  
せめての救多の小児の中はまが子は似る面さうしつら

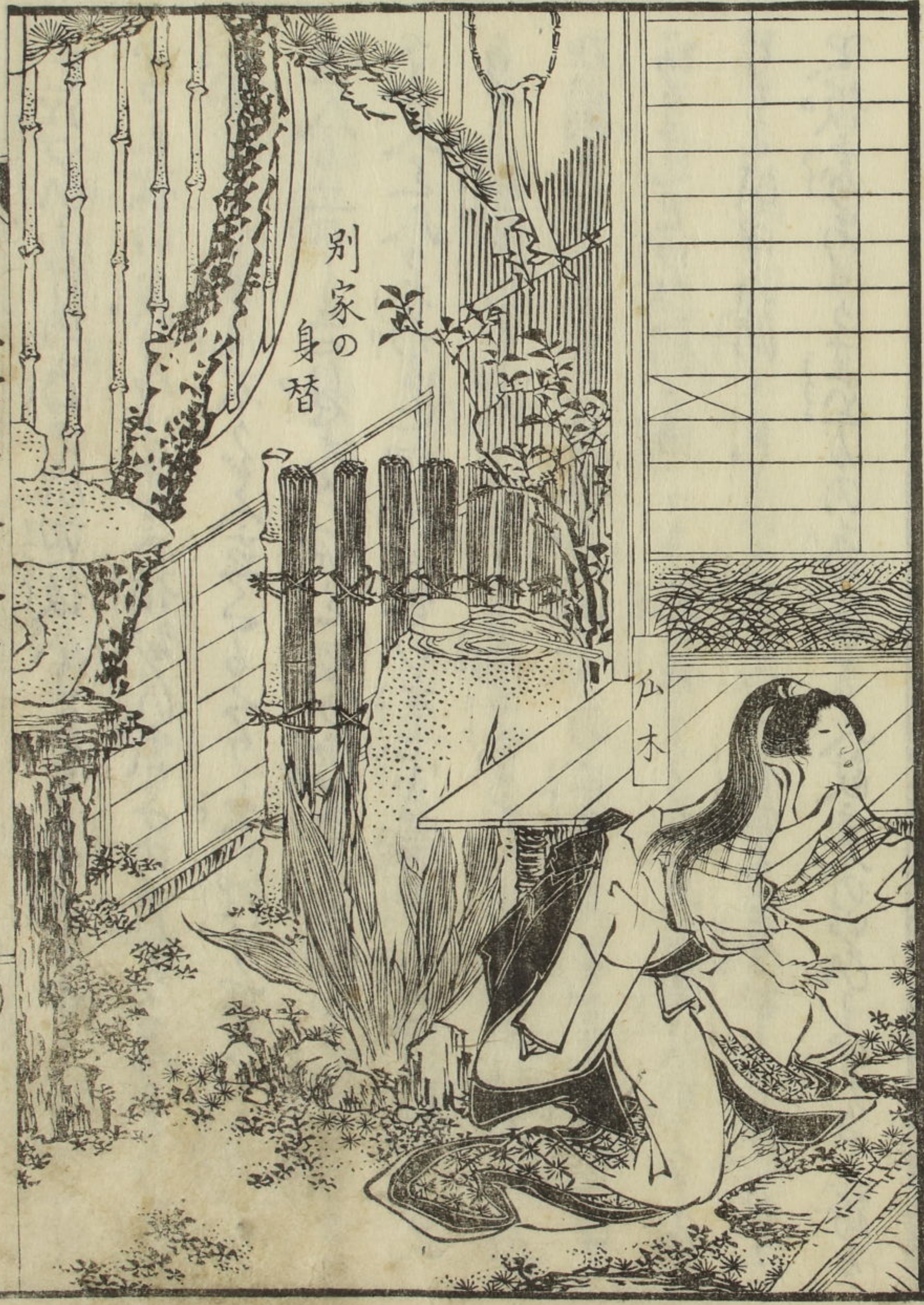






ようにて勅當をとりて夫よりけ地を奉りて高家と成りも満祐の  
 二の武林義教をを試しまり西に還はる主君の幼少赤松家の  
 滅亡をくるゆと推さるる系来二君は仕ある心成りぬれぬ  
 六良元徳と号せ世を海り兒一角へ入たどの心成りぬれぬ  
 打死らじ退る供養も世を悔り教多の小兒をまに育せぬ  
 是則我死の一族が佛果のゐる善根ぞや松る主君は  
 どの能持と名きて懐かや嫡子諸も又もや運まの企り  
 とやうりさへいへんとあへん心を碎くは往年皇都大  
 原野をわけて務表代君のを指ひよりけ若君を入たどの年  
 ようけさせるば細川家への恨もすじに交せんとはひのり

痛くは務表代君も害一かて教多の小兒の其中は年恰好  
 の似もがふと思ふ程は福荷の表もて指ひ男子務表代君は  
 よく似たり其上は小兒の細川の家主神乐良之八の形なりと  
 後身妻の書はけは妻よくはる外は主人の身がわりは是  
 僥倖と云ふ塔前瘡瘡の熱毒せり又務表代君の瘡瘡と  
 つひにじげとて別家を朱はあつひも血汐は染て死せと  
 つひにの初らせはまらるる時も時と入たどの系推さるる  
 遠の尺や奉り務表代君を害せしと指染の中へ之松の母  
 と名をひて来ぬと歌子の對面は尺の若君のゐる  
 袖をひびくつひに水もたぬと松の首をおるある



別家の  
身替

瓜木



六郎九工門

まがびひまけのゐのけ切後今うそそ年月さるひてる傳  
つる松の白くくまよ指おんお子の首をかかふるもね  
氣のどく母丸木くぞんまこもろりそい程りせりて衣あり  
主人も苦き息をつたえ松う深きお釣を逐く故よ  
父と八く集まじ細川家のまま宝富士丸の御奴いごま  
かてぬま何ま又と松より尚まはたうは思ふ猶後代君  
を同たりまむ故主へ故系のお産まはまよらるる  
はるはとつひひく遠より相法より若君を伴ひかふるべ  
とまはひひのゆく色こそ世へま松を尋かして連海り  
と扱まあるう其方のおまも又故主へのひひまけとある

方おれ指圖して早は土は用おれお所と奴をねげお息  
絶す丸木の志なく洞まうお子の比骸えおち猶後代君  
たつまおれ救まの小児をまを主人の死骸ますうつこ  
恩ををま子ゆま歎く洞ままの實のこまそまおの水  
りりや死出の山何げはもせで死つるお子の死骸を  
まお主の若君のおまは傳へし奴も共まお得てりひく  
都路じてまゆる。

キノニ全傳後河奔卷之五平

